
A F I A N C E

諒汰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A F I A N C E

【Nコード】

N 9 1 6 7 D

【作者名】

諒汰

【あらすじ】

ここは近世未来の日本国。その三大財閥のお嬢様の梨奈、美鈴。そして梨奈の専属執事翔太（黒の燕尾服に何故かメガネ。髪はボサボサ。ハッキリ言ってダサイ。）美鈴の婚約者博人。この四人の損実の関係は！？謎多き執事と主人の関係。周りの人を巻き込みながら進んでいく凸凹ラブストーリー！

前編

ここは私立晴嵐中高一貫学校。財閥令嬢、御曹司が通うエリート学校でございます。

皆様が良く、礼儀正しい事で「まてえー！猫かぶり女王がー！ーッ！ー！」

・・・品が良く、礼儀正しい事で「うつさい！人前で恥ずかしくないのかあーっ！ー！」

・・・有名はずなんですが・・・。

「ってゆうか、使用人が何フツに主人にタメ語使ってるわけ！？」

「ぐっ！ー！そこ付かれると困る・・・。」

「おはよう、梨奈さん」

「あら、おはよう。美鈴さん、今日もお綺麗でしてよっ」

「それはありがとう。ではまた後で、ごきげんよう。」

「ごきげんよう。」

「・・・ぶっ・・・くっくく・・・」

「ちよつと翔太！何がおかしいのよ！」

「だって、、、さっきまで怒鳴ってた奴がいきなりごきげんようだぜ？」

「しょうがないでしょ、そういう学校なんだから。」

ここは近代未来の日本国。階級が分けられ、それによって行動も制限されている状態。

そしてこの晴嵐学園には、日本国三大財閥の一家、岡田家と近藤家の令嬢も通っていた。

もう一つの大財閥、前原家の御曹司はこの学園の何所かにいるとされている。

「コホンッ・・・では改めまして、お嬢様、参りましょうか。」

「そうしましょう、美鈴さんも待っていらつしやるでしょうしね。」

そう、何を隠そう梨奈さんが岡田家、美鈴さんが近藤家の令嬢でありました。

教室のドアを翔太が開け

「どうぞ、お嬢様。」

「ありがとう。」

「「おはようございます、岡田さん」「」

「あら、皆様おはようございます。」

「梨奈様、おはようございます。それから、翔太さんも。」

「おはよう、博人さん。」

「ひいゝろおゝとおゝ。私より先に私の親友にあいさつするとは何事だ！」

「ぐえっ！！くっ 苦しい・・・！」

「美鈴！博人さんが苦しがつてるわ！首から手を離さない！それにあなたはさつき

校門前であいさつしたでしょうにっ！！！」

「そうでしたっけ？」

「そつよ！」

「まあ。まあまあ・・・。私ったら、ゝゝ。」

「お話中失礼いたしますが、お嬢様方、とつくにチャイムが鳴り終わっていますよ」

「きやあっ！大変！翔太、授業の仕度は出来ていて？」

「もちろんです。」

「私も急いで準備しなくちゃっつ！！！」

「大丈夫です。美鈴様の分も準備できておりますから。」

「うおわぁ・・・。さすが翔太ね！！！」

「岡田家の令嬢に仕える者として、これくらい出来なくてどうしますか。」

「・・・それではこれで午前の授業を終わります。ところで皆様、来月のダンスパーティーの

お相手はお決まりで・・・？まあ、大抵の方はご自分の婚約者と出ると思いますけれど、。

なお本日の午後の部はダンスの練習ですから、着替えて体育館集合ですよ。では解散。」

「梨奈さん！ダンスのお相手はもうお決まりで？」

「いいえ。まだ。」

「なら、僕と組んでくださいませんか？」

「え・・・失礼ながら、本日の練習よりお嬢様の婚約者様もいらつしゃるとゆうことなので」

「！？翔太！私そんな事聞いて無いわよ！？」

「言つてませんでしたから。」

「っ！翔太！命令です、答えなさい！私のお相手はどなたなのです！」

「前原家の御曹司様です。」

ざわっ

「前原家つてあの！？」

「今まで一度も顔を公開した事の無い前原家の御曹司様だと！？」

「さすが岡田家令嬢様の婚約者ですわ！」

「じゃあ、三家一つの近藤家美鈴様のお相手は一体どなた？」

「私の婚約者・・・？博人だが？」

「なんですつてええつつつつつ！?!?!?!?!？」

「あれ、お嬢様知らなかったんですか？」

「翔太は知つてたのね！？なんであんたは知つてて、私には教えてくれないの！？」

「いろいろと事情がありまして。」

「父様の命令？母様の命令？どうして！なんで！」

「旦那様達からの命令ではありません！私の意志と事情です！」

「っ！翔太なんて大嫌い！いつも隠し事ばかりして、何にも本当の事は教えてくれない。」

笑顔にだって何か影が落ちてるし！鈍感だし、いつも人の事子ども扱いばかりするし！」

「何て言われたっていいです。今更な事が多いですし。」

「！！！！・・・はあ、何かもういいわ。とっととお昼ご飯にしましょう。お腹がすいたわ。」

それにお相手がいらっしやるなら、しっかりとっておかなくちゃ。」

「・・・それほど構えなくても良いお相手だと思いますけど・・・。」

「

「？博人さん、何かおっしゃりましたか？」

「いいえ、なにも。」

「そうですか。」

前編（後書き）

皆様どうもこんにちは。私は諒汰と申します。先日このページにデビューさせていただいたばかりの新人です。これから頑張っていきなすので、少しでも興味をもたれた方は、引き続き読んで頂けると嬉しいです。

中編（前書き）

雑草〃ちくさ 注意：今回から名前が変わってくる奴が数人出てきます。

中編

「翔太のアホーつつ」

「俺がなんだってえええ（怒）」

「うぎやつとお！あぶねえ！つか、か弱い乙女を殴るんじゃない
えよ！」

「か弱い乙女？どこどこ？つか殴っても当たって無いんだから
いじゃん」

「良くねえし！」

「どーすんの。」

「何が。」

「ドレスの事だよ。そのためにここに来ただけど。」

「あーっと、黒の一番のお気に入り奴。」

「あー、あれ？」

「うん。あれ。」

「それではただいまよりダンスパーティー予行演習を始めます。男
性陣は相手の

女性の元へ行って下さい」

「博人、こつちだ。」

「アー、いたいた美鈴さん。あいつは？」

「あつこに梨奈が一人にいるってことはまだ来て無いんだろう。」

「そうかー……。何してんだろ、あいつ。」

「誰も私のとこ、こねえじゃんか……。」

ざわっ

「なあ、あいつ誰だ？」

「見たこと無いな・・・。」

「ってことはあれが噂の・・・!?」

「ってかかつこよくない!？」

「薙草！お前遅かったなあ！」

「！博人君が話しかけた!!!!」

「ちよつと着替えるのに手間取つてな。」

「よお薙草・・・いや、ここでは翔太と呼んだ方がいいか？」

「どっちでも良いですよ、美鈴さん」

「梨奈！ちよつとこつちにおいで！」

「？はいはい何？ってか、こちらどちらさん？」

「ひどいですねー、自分の執事の顔を忘れるなんて」

「!？翔太!？」

「正しくは、前原薙草ですけどね。」

「どうゆうことだ!? 翔太、博人、美鈴！」

中編（後書き）

ここまで読んでくださった方、ありがとうございました。まだ後編を書く予定ですので、

なにとぞお付き合いよろしくお願いします。

メモメモ

諒汰（ ・ ・ ） φ

後編 最終話

「説明しろー！こんちくしょーっ！」

「だー！叫ぶなー！注目される！俺は注目されるのは嫌いなんだーっ！」

「梨奈、黙りなさい」 ゴンツゝゝゝ

「っ！い、、、たい、、、」

「うわ、、、いたそ、、、」

「ちよつと博人、ボーっとしてないで説明してやって」

「あ、はいはい。」

ボソツ「こりゃ絶対主婦関白な家庭になるな。」

「あ？翔太、なんか言ったか？」

「いや、なんも。」

「えつと、説明するとだね、前原家の跡継ぎは将来結婚する相手に執事として

仕えるのが仕来たりなんだよ。まあ、大抵は自分の正体を明かして仕えるんだけど

薙草は偏屈者だから明かしてなかったみたい。」

「どーゆー仕来たりなんだよ、、、」

「だから博人はあたしに仕えてたんだよ」

「、、ん？あれ、博人も美鈴に仕えてた、、？」

「そうよ。」

「俺と博人は双子だからな。」

「ええつつっ！！！そうなの！？しょ、、じゃなくて薙草！！！！」

「ああ。まあ二卵性だから顔は似て無いけどな」

「知らなかった。。。」

「だろうね。」

「薙草、梨奈と踊ってきたら？」

「えつつっ！」

「そうだな、。お相手お願いできますか？お姫様。」

「つつつ！！！！はい、。。」

「行つてらっしゃーい。」

「美鈴さん。俺たちも行きましょう。」

「、、、、。そうね。」

「それにしても何で黙つてたのよ。」

「だって、俺が婚約者だつてなる前の素のままの梨奈見たかったから。」

「なら一ヶ月くらいでよかったじゃない。何で3年間も。」

「、、、だからだよ。」

「は？何て言つてるの？音楽で聞こえないんだけど。」

「だから、お前はすぐに俺に懐いただろ？」

「うん。」

「それは何でだ？」

「うつつ！！！！それ、、は、。。」

「俺がお前に明かさなかつたのは、お前の事が好きだからだ。」

「！！！！つてかだつたら普通言うでしょ？」

「これまで築いてきた関係が崩れるのが嫌だつたんだよ。」

「そんな事無いのに、。。」

「は？何で言い切れるわけ？」

「私だつてお前の事が好きなんだよ。だけどそれを口に出したら、主人と執事だからって、

離れさせられちゃうと思つたから言わなかつただけなんだからつ！」

「、、、何だ、、じゃあお互いに遠慮しあつてすれ違つてただけなんだ、。。」

「、、、そーゆーことになるわね、。。」

「じゃあ、、岡田家梨奈様。前原家長男、薙草の申し出を受けて

「いただけますか？」

「はいっ！」

「よしっっっ！親父たちに報告に行くか！」

「今から！？授業と外出届わ！？」

「もらってきたから大丈夫♪」

「美鈴！」

「いつてらっしやい。それから、、、おめでとう。」

「美鈴、、、ありがとうっ！……！」

後編〜最終話〜（後書き）

やっと終わりました！いいのか！？こんな終わり方で！
あ、でも希望があればその後の話を書くかも、、、。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9167d/>

A F I A N C E

2010年10月9日03時04分発行